

土 淨

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受郵便誌)第三二五号
昭和五十年八月二十五日刊 昭和五十年九月一日発行

第四十一卷

第九号



1975

9



忍

野村 宗春

(東京芝・常照院住職)

耐え忍ぶことを生活の規範とするよう、身をも
って教えこまれ、育ってきた我々の年代のものに
とって、現代の若者の言動はなかなか理解しがた
い。いかに寛容な態度をもってしても、あまりに
も不可解な言動に接すると、どのように対処すべ
きかと、迷うことがしばしばある。こうした時、
世代の相違ですとひと言、こともなげにかたづ
けられてしまい、何ともいいようのないさびしい
思いにかられる。

しかし、次代を負う若者たちに、我々はすべて
を賭ける。いや、遠き昔より祖先代々綿々と受継
がれてきた良き慣習を、更に子々孫々にまで伝え
ていくために、若者たちに賭けざるを得ない。

己れの立場のみを主張、誇示する若者も、世間
の無言の荒波にさらされ、やがて「忍ぶ」方策を
自然と身につけることだろう。それが生きぬくた
めの良薬であると知るからだ。

九 月 号



目

次

忍.....	野村宗春
火事・おやじ.....	竹中信常…(2)
彼岸法話 到彼岸の道.....	津村諱堂…(5)
追放されていた.....	小橋麟瑞…(8)
老のくりごと(繰言).....	福井明賢…(12)
ご法語をいただく 法然上人の人と生活⑨	
聖の足跡を訪ねて.....	宝田正道…(15)
書の四季⑥ 徳門普寂上人.....	林錦洞…(20)
カナダ雑感.....	佐藤美智子…(23)
釈経歌集「続々法の衣」に就いて③.....	石畠俊徳…(29)
インドのことば.....	松濤泰雄…(34)
念仏ひじり三国志⑦法然上人をめぐる人々.....	寺内大吉…(39)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



火事・おやじ

竹中 信 常

(大正大学教授・文博)

「みるほど、頭のさがる稲穂かな」

田畑には黄金の波が風になびく季節になった。食糧事情からか近頃余り顧みられなくなった稲作が、本年は一段と旧に復して、豊かなようである。穂先には丸々と実った米粒が重そうである。ピンと立っていた穂が、一日とその姿を変えて、此頃ではぐっと曲って地面につきそうである。それは丁度、何かに向って、深ぶかと頭を垂れる人の姿に似ている。

それにつけても、近来の世相はどうだろう。電車に乗ると、大股を開いて二人分の席を占めて威張っている若者の多いこと。本人はその気ではないにしても、その姿はまるで電車一台買いしめしたような態度である。むろん老人子供に席を譲る気ぶりなど微塵もない。他人の迷惑など思ってもみない。それでいて自分のこと、自分の仲間のこととなると目の色を変える。過激派の内ゲバがその一例である。学園から街頭に進出し、さらには国電内で一般の乗客まで巻きこんで、沢山の怪

我人を出しても、相手をやつつけねばそれでよいという。もっともこうしたエゴ、特に党派エゴはゲバ学生に限ったことではない。人の集りのすべてに多かれ少なかれみられる。政党など保革のいづれを問わず、エゴ丸出しの争いで、肝心の人民などどこかへ消しとんでしまっている。労資の対立もそれぞれのエゴの咬み合いである。

お盆に合せて方々のお寺で行われる施餓鬼の法要で、導師が読む疏（しよ）の一節に、

「方は類を以て聚り、物は群を以て分る。その居や難難嶮嶮、その党や嫉妬憎貪、真に哀むべく誠に畏るべし……」

とある。集団エゴの恐しさを、仏教では早くから教えているのだが、ひとびとは一向に気づかずにいる。そして集団の力を自分の力と錯覚して自分が一番強く、自分が一番正しく、他人はすべて間違っていると思ひこんでしまう。

○
ところで、昔から、わが国には

「地震、かみなり、火事、おやじ」

といつて、こわいものの筆頭に「おやじ」があった。おやじばかりでない。われわれの子供の頃はこわいものだらけだった。いたずらをするに「お巡りさんを呼んでくる」といわれ、勉強しないと「学校の先生にいうぞ」とおどかさされた。母親の言うことをきかず駄々をこねていると「お父さんにいいますよ」といわれて、おとなしくなったものである。

家には必らず仏壇か神棚があったものだ。

よそから珍しいものを貰うとまづ仏壇に供えて、チーンと鐘を鳴らしてから分けて貰う。学期末に通信簿を貰って帰ってくると、母親はそれを受けとって、そのまま仏壇に置いてチーンである。それからおもむろに開いて、

「甲が一つへったネ」

とジロリと睨まれると、うしろに坐っていて首をすくめたものである。寝坊して学校におくれそうである。大あわてに顔を洗ってお膳の上の箸をとろうとすると、

「仏さまにお早うございますをいったかエ」



分秒を争ういそがしさの中で、母の声は無情である。馳けて行ってチーンと叩いてパット手を合せて、「いただきます」と御飯をかきこむ。どんなにせわしくとも、どんなに眠くとも朝晩のお仏壇は至上命令だった。お仏壇など無ければ良いと何回か思ったものがある。

戦前派、時には戦中派と呼ばれる人びとには、こうした経験が多かれ少なかれあったと思う。そしてそれがいつの間にか心の底に定着して、頭を下げることを覚え、また頭を下げる相手を心の中に持つようになったのである。

頭を下げるということは相手を尊敬することである。相手を尊敬するということは自分というものの、自分の価値とか身分とか能力とかを充分わきまえてのことである。つまり自分というものをよく知ってのことである。人間には限りがある。どんな人でも限界がある。それがはっきり分ると、限界以上の世界、限界以上の存在が理解されてくる。そし

てこれに向って自然に頭が下がるのである。

悟りを開いて仏となられた釈尊ですら、

「尊重することがなく、信順することなくして住するは苦しみである。われはいかなる沙門、バラ門を尊重し、尊敬し、親近して住しようか」(パーリ相応部六・一・二)

と述懐されている。すでに仏となられ、最高完全な人格を具えられた釈尊にして、なお、信順し、尊重するものを求められたのである。つまり頭を下げる相手を求められていたのである。

○

さいわい、わたしたち浄土の信仰を抱くものには信順し、尊重し、尊敬し、心の底から頭を下げるのできる相手が、厳然としてある。アミダ仏である。智慧第一といわれた宗祖法然上人でさえ「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏」された、その相手のアミダ様である。このような立派な相手を持つわたしたち浄土宗のものは、まことにしあわせと申すべきである。



到彼岸の道

——法然上人の他力について——

津村諦堂

(秋田県角館町報身寺住職)

法然上人の教えは、阿弥陀仏の本願力を信樂し、称名念仏を往生の正定業とする易行他力の法門であることは今更述べるまでもないところであります。

このことは、法然上人の著作、法語、消息などの中に、一貫して説かれている根本思想であります。即ち法然上人は「往生大要抄」の中で、

また、この聖道浄土をば難行道、易行道と名付けた。喻へを取りて是を言へば、難行道とは、さかしき道をかちよりゆかんが如し、易行道とは海路を船より往くが如しと言へり。然るにめしい、足なえたらん者は陸路には向ふべからず。只船に乗りてのみ向いの岸につくべきなり。然るに此比の我等は智慧の眠しい、行法の足折たる輩なり。聖道難行のさかしき道には都て望を断つべし。只弥陀の願いの

船に乗りてのみ生死の海をば渡りて極楽の岸にいくべきなり。今此船と言ふは、即ち弥陀の本願に喩ふる也。此本願と言ふは四十八願也。其中に第十八願を以て衆生の往生の業と定める本願とせり

と言われ、また三卷書第一卷往生記の中で、往生の機根の一つとして他力を挙げているのでありますが、これらは皆、易行他力の教えを基礎づけるものであると思われまふ。

ところで、他力というのは、自己以外の如何なる力にも頼らず、自己の力だけですべてを処理するという自力に対する言葉であつて、自己以外の或ものの力に全面的に依存することを意味するものであります。

即ち往生極楽の目的を達成するためには、聖道門のいう仏教の智的理解とか、或は財力による造像、起塔、布施とか、

或は難行の持戒持律、修善廻向などの自力的修業に依らず、念仏衆生摂取不捨の弥陀の本願力を固く信じ、これに身を委せることをいうのであります。

法然上人は、このことを選択集の中で、聖道門的自力往生は現時末法社会に於ては、往生の正因ではないことを明らかにし、濁世末法に於ける往生の正業は他力易行の専修念仏に在ることを論証して往生之業念仏為先の易行他力の浄土門を確立されたのであります。

ところで、他力本願ということとは、所謂阿弥陀仏の本願力に自己を全面的に委せるといふ意味に受け取られますが、その場合委せ頼るべき本願力を、どのようなものと考ええるかによつて、他力の意義が異なるものと思われまふ。即ち、

一は本願力を衆生を支配する客観的、超越的不可思議力と考える場合

二は本願力は衆生の心の中に主観的に内在するものであつて、衆生が往生を得んとする自主的意志の源泉と考える場合

であります。前者は魔術的であつて、本願力を不可思議力と見、念仏を呪文と考えるものであり、後者は仏の本願を固く信じ、仏の本願に順じられるよう努力精進する衆生の意志力の根源であるとする考えであります。

このように本願他力について相異なる二つの考え方があつた

であります。この異なる考え方の起る根拠は何かといひますと、それは經典に書かれている内容の信じ方にあると思われまふ。つまり一つは經典の内容を字句通りに解釈し、信ずるものであり、もう一つは經典の字句の奥にひそむ仏陀の真義を理解し、信ずる場合であります。

仏陀は仏陀自身の間苦解脱のさとりを、衆生に説き、自己と同じく成仏を達成せしめようとして、すべての衆生に理解し易く、衆生の機根に応じて臨機応変に様々な方便譬喩を以て説き示されているのであります。従つてその方便譬喩をそのまま受け取る時は現代人の精神状況に合はず、不健康なものと考えられるものが多いのであります。

現代仏教を説く人々の中では、仏教を歴史的に研究する人々は別として、教理の面を説く人々は概ね前者であつたと思われまふ。その為、諸学者の間に、「念仏は呪術か」が論議され、パートランド、ラッセルが「宗教の不必要」を叫んでいるのであります。

他力本願という意義の解釈も前述の如く二つの考え方があつたように思われますが、再言すると即ち、

一は、第十八願の字句の内容をそのまま解釈し信じ、仏を超越的存在として不可思議力と見、往生はその力によつてなされるとすると思つて考へるもの

二は第十八願は仏が衆生に対して願往生の心と、必得往生の確信を以て正定業に努力するよう促す働きと考えるもの。前者は衆生の往生は、すでに仏側において準備されているとするものであり、後者は衆生が仏の本願力を信じ、その教を守りそれを実修することによって与えられるという衆生側の自主的実修を一因と考えるものであります。

従って前者の場合は衆生は全く無為無策で良いのであり、金剛不壊の信心を以て只信するだけで足りるのであって、少しでも衆生の自主的働きがあれば、自力を混えるもので仏の本願力を信じないものとされるのであります。

後者はこれに対し、經典の字句通りの解釈ではなく、字句の奥にひそむ本質に立向って仏の真義をさとり、これを信じ実行する立場であります。

ところでこのように仏意の解釈の仕方に二つがあるようでありますが、法然上人の考えた他力本願とはどちらであったでありますか。それは私は第二の考え方であったと考えるものであります。

即ち、一心に念仏に専念することによって人間苦の超克即ち往生が可能であるという仏陀の体験と実証と覺りを固く信じ、これに依拠し、念仏実修という衆生側の自主的実践の一面を前提とする他力であると考えるものであります。

法然上人が「ただ一向に念仏に申せば」と明言しているように、往生の一因として「専修念仏」という衆生側の意志活動を前提とし、これを要請していることは確かであります。法然上人は「一念義停止の起請文」に、

弥陀の本願は、行を伴なわざる念仏は非法であること、一念にも往生可能であるからとて無行無念に陥り、更に念仏を滅罪の呪文と心得て罪行を顧みざること
を強く抑止しているのであります。

法然上人は善導大師の觀經疏によって、阿弥陀仏の本願力を確信し、そこから仏陀のさとりと実証に達し、これを謙虚と誠実を以て信賴し、その教示に従って称名念仏に専念し、学解の仏教即ち法による仏教から信行の仏教即ち仏による仏教という新しい価値を創出し、危機不安絶望に陥って苦しむすべての人々を救わんとした仏教の転換者であったのであります。

要するに法然上人の他力の意義は、經文の外的顯義としての字句の意味する内容の鵜呑みではなく、これを通して仏陀の内的秘義たる成覺の因、即ち称名念仏行を必得往生の道即ち到彼岸の道と信じ、これに全面的に依存することであると考えるものであります。

追放されていた



小橋 麟 瑞

(神奈川県厚木市天宗寺住職)

これは私の思い出の記録である。編集部と約束したこともあって探して見たら。こんな原稿が出てきた、気まぐれな話だが、その頃の世相も偲ばれるし、自分の生活も大きく変ってきたようである。

現在単一孤独？ 八十歳を越えた現役僧で、何の変哲もない。(以下旧稿のまま)

○ 昭和二十六年といえは、私にとって忘れることのできない年であった。幼い子供四人ひき具して、見も知らなかった天宗寺に越してきてから丸三年。生きて行くのが

ようやくのことであった。

ある日のこと、県庁から事務官らしい人が天宗寺に訪れてきた。ボロボロの部屋。玄関の三畳、座敷の六畳、離れの四畳半、それも本堂の横手に突出してくっ付けた建物で、壁は落ち、天井は雨もりで所々にシミのあとが地図のような模様になっていた。そこには整理の仕様もないまま雑然と書棚やタンス、その他の道具類で一杯だった。子供達は本堂の外陣十六畳に寝せていた。

誰が訪れても通す部屋はなかった。よくれた本堂の縁側まで、靴履きのまま上ってこられても文句は言えなか

った。手がないのでお茶を出すこともできない。みすばらしい座ぶとんだけは十枚ほどあった。その中の良さそうなのを一枚選んで薦めた。

「実はこの先の自転車屋さんで聞いてきたのですが、小橋麟瑞先生はあなたですか」

という。こんな立派な紳士の風体をした人から先生と呼ばかけられたのは、神奈川に来てから初めてのことであつた。

「他に小橋さんという方は知りません」

「今何か政治活動をしておられると思うが」

といったが、その自転車屋さんは、

「そんなことはありません」

という。天宗寺の小橋さん以外に小橋さんという人を知らないとのこと、半信半疑でこちらをお訪ねしましたが、それではやはりあなたが小橋先生でしたか、ということで話が始まった。

この県庁の事務官らしい人の話によると、終戦直後私は鹿児島県で追放されていたのである。

戦時中、私は田中国広大將を会長とする明倫会に加わ

り、明倫会鹿児島支部の幹部として、月に二三回将官や佐官級の人達と七八人づれで腹々会食して、時局を談じていた。私の師僧も一緒だった。

私は昭和十五年四月、鹿児島を離れて一家東上した。それ以来明倫会とは事実上没交渉になっていたし、目まぐるしい身辺の事情で、明倫会関係のことなど想い出しもしなかった。

あれから敗戦を前に信州に疎開したり、本郷の義父母の家を單身警護したり、敗戦後は老いたる義父母の死を送り出したりしてから、神奈川に落ちつくことになったのであるが、前途の希望は全くなかった。一家東上してから既に十一年を経過していた。

今、突然こうして県庁から居所を突止められる理由は何であつたらうか。明倫会に関係していた鹿児島在住の頃は、いつも特高警察が二人で組んで、チヨイチヨイ身辺の状況調査のため、それとなく立寄っては話していった。かれらは私のことを先生々々で、接する物腰は極めて丁重であつたし、別に隠れて策謀するような内容も持っていないので歓待し、歓談して帰っていた。今ま

たこうして県庁から訪ねて来たについて、何の用件か全く見当もつかなかった。

次第に話を聞くとところによると、敗戦と共に鹿児島県で追放され、東京都にその後引きつがれ、それがまた廻り廻って神奈川に引きつがれていたというワケだったのである。

「この際、先生のような有為な方を、是非追放から解除して差上げ、もう一度国家社会のために起ち上って頂きたいというので、実は特別個人審査のためお伺いいたしました」

「イヤ私はそのような大物ではない。ザコに過ぎないんだが、あなたの方でそのように大物扱いになさるのならついでに大物になりましょうか」

と、私は冗談をいって笑った。

大川周明先生などは到底解除の見込みがありませんがとも、事務官らしい人はいった。とんでもない比較だ。

それにしても自分が追放されていたなどは夢にも知らなかったのである。幸か不幸か私はそれらしい公職には何も就いていなかった。子供の学校関係でPTAの役

員ぐらいが精々のところだった。

明倫会関係の幹部で、今尚小田原に在住している先生がおいになるから、是非お会いになったと勧められた。その後勧めに従って小田原の住居を往訪したが、折柄東京に行かれて不在ということでお会いすることができなかったが、それっきりで今日までお会いする機会もなかったし、お会いして見ようとも思わなかった。今はもう故人になられたに違いないし、その人の名前も忘れてしまった。浜田という鹿児島県指宿出身の智謀の少将のことや、伊丹という戦争で片脚を失った將軍のことなども思い出した（この將軍とは一夕暮を囲んだこともある）。

県庁から事務官が来て、私に対する個人特別審査が行なわれたが、その後いくばくもなく時の総理大臣吉田茂の名をもって「追放理由取消」の通知を受取った。内容は要するに勅令第二条C項の「該当理由を取消す」というものであった。

この勅令第二条C項というのは「極端なる愛国思想」というのである。変れば変るもので、戦争中は愛国思想なるものは、極端であればある程良かったのである。あ

の頃のマスコミは国を挙げて鬼畜アメリカをえぐる報道に終始していた。満州事変から日支事変となり、遂にパール・ハーバーの奇襲攻撃となり、ヤンキーをして「真珠湾を忘れるな」という挙国的な敵がい心を発させたのであった。

「現地報告」という当時『文芸春秋』の別冊月刊誌があった。一文を草して「ようしやるゾ」と題して短文を投稿し、それが掲載されて金五円也の稿料を貰ったことがある。その頃の五円はまだ相当の価値があった。米なら二斗ぐらいいは貰えたと思う。今ならタバコ一本しか吸えない。

それはとも角として、敗戦で脳天を叩かれ、その上追放の憂き目を見たわけで、追放解除の日付は昭和二十六年八月六日である。これは第二次の特別個人審査による追放解除であった。

この時、私の母方の従兄弟に当る高坂正顕も解際になり、有名人となっていた彼は、大きな活字で見出しの中に八木秀次氏などと共にその名が発表されていた。

後日そのことについて高坂氏に逢った時、麟瑞さんも

そうだったのですかということで、話は他の方へ軽く移っていったが、追放されていることを知っていたら、それを売物にするんではナと自嘲。もちろんその頃、誰も買ってくれる人はいなかっただろうけれど、何だか惜しいような気もしたというのが偽らぬ追想になっている。

さて長々と身上話になってしまったが、この昭和二十六年に特筆すべきは、講和条約や安保条約でホッとした以外、国民的意気は挙がらなかった年のようである。

この年五月十七日貞明皇太后がおかれになったので私は大きな位牌を書いてお追善の回向を申しあげたが、今もその位牌はそのままお祀りしてある。

虚脱状態からまだぬけきらぬ国民の気分の中で、机にかじりついている日の多かった私は、この頃頻りに原子や宇宙のことに氣をとられていた。

偶々それが年内に作り上げなければならぬ作詩の中心課題になっていた。この辺からそろそろ病みついて、原子論を研究してみたいような氣持が根ざしていたらしい。

(以下省略)



老のくりごと(線言)

福井明賢

(無為庵主)

(東京都港区南麻布瑞華院住職)

拙老(わたし)は遇う人ごとに「お元気ですネー」という御言葉を頂きます。

人間お互いの挨拶は心のふれあいの第一歩で、洵に貴いことであり、「今日は」とか「しばらくでした」とか、極く懇意な間柄では「ヤー」とか語りあう、この一語が心のすみまで響いていきます。

近時青年はしらけているとか、尊大振っているとか言われていますが、社会人類の恩恵を受けながら感謝の意も起さず、白けきった青年が多いといわれているのではあるまいか。

わが身をふりかえってみれば五蘊仮和合の吾が身であ

り、六根六識の和合のお預りものであり、吾れ独りで生き行けないともいき世界である。私は近時視力減退して、順次眼耳鼻舌身意の衰退をはなはだしく身に感じます。特に視力の減退には眼科医の指教によれば、青年時代の酷使が今日あらしめた由、反省をしています。

私は宗教大学在学中、六号訓点付縮冊大藏經(本郷湯島博文閣出版)に際しアルバイトとして、般若經二冊・阿含經一卷(三巻にて廃刊)の校正をした経験があるため、宗教大学研究科卒業と共に宗命に依り、大正元年内地留学生として研究に従事し、大正三年恩師椎尾升匡先生の提擧に依り南条文雄・松本文三郎先生、中野達恵・

草村松雄氏等日本大藏經出版（新版百卷）に従事し、編集校定の責任を受け、校正の如きは六校七校と経て校了とし、誤謬なき大藏經と称せられ、大正十年その校了了えたのでしたが、思えば視力減退の最大原因はこの出版事業でありました。

想えば恩師椎尾先生は晩年に至り、人も知うるる如く失明の域に入られ、とおく鑑真大和尚としのばれてますが、眼疾は緑内障で三回井上眼科にて大手術を受けられ、いつも私は立ちあわせていただきました。この眼疾の最大原因、先生は一宗留学生として記念興学舎を新設して、あの梵文原典の研究に猛烈なる研究を進められたことは余りにも有名で、帝大卒業論文にその経過を記され、恩師姉崎博士をはじめ帝大の多くの教授陣を驚嘆せしめられたことが有名であり、前記の如く晩年に至り、まったく失明人となられましたことは衆知の事実であります。

私が宗教大学在学中は伝通院側の所謂ブタ小屋時代でありました。当時学長は黒田英洞老師で、宗学に黒田・大鹿愍成・神谷大周・越智専朋の諸老師、帝大より姉崎正治先生が印度宗教史、村上專精先生が支那仏教史、権

田雷斧阿闍梨の真言教学・悉曇学、独逸より帰朝の荻原・渡辺両先生は聖語学、島地大等先生の天台学、河野法雲老師の華嚴学、上杉文秀老師の教行信証六要鈔の講義、島田鈞一先生の漢文学、山門信次郎先生の英文学、稲田素海老師の録内録外の日蓮教学、武島羽衣先生の国文学、白鳥庫吉博士の東洋史特にチベットに関する研究、福原友吉先生の変態心理学・論理学、椎尾先生の仏教概論・仏教哲学等、実に錚々たる一流の学匠が宗教大学に集っておられました。これら諸先生の講義は数十冊のノートとなっております。今や諸先生の一人もなし、誠に感無量のものがあります。

これら恩師に対し、旧友小野玄妙・田中啓肇・望月信道・石井教道の盟友おこがましく諸先生を批判し、今や恩師の金言業とか金欄簿とか、何一つ残っていないのはいかん至極です。

近時ある仏教系の高校教諭のお話しを受承りましたが学級三年に「いろは歌」を七五調に詠んで、その意義を試問したのに、一人として満足なる答えをなした者がなかったとか。またある誌上によれば、ある劇場の学校卒業生を集めて劇の台本を読み合せをしたる時、「子はカ

スガイ」という句があつた。その内容を一同に正したところ一人の解答者があり、その説明を求めたところその女子は答えていわく、この頃の子は出来が良いと大学に入っても内ゲバをおこしたり、甚しきは爆破事件等を起こすから、むしろカスミたいな子の方が安心である、され

秋のお彼岸

ハガキでひと言

吉田 和雄

(東京都練馬区上石
神井在住・会社員)

蒸暑い夏が終るとすぐに秋のお彼岸が来る。私にとってお彼岸は、一つの心の区切りとして大切なものであります。秋のお彼岸は春のそれとくらべると、これから来る冬に向うという意味で厳しいものを感じる。

秋の彼岸の墓参りは、夏の間ついついゆるんでしまった心を先祖の前で反省し、気持ちをひきしめる意味もある。欠かせぬものである。

今年も家族そろって近所の菩提寺へ行くつもりである。

ば「子はカスガイイ」といったそうだ。呵々……。私は毎年増上寺の加行道場で講述中、左の意義の解釈を求める時がありますが、満足に答える者はありません。

カスガイイ

カ

四字合成の風ふけば

霧雲はれて弥陀ぞあらはる

ましてや「キリク」(右下)の書法に至っては、了解なきは当然であります。

近代聖語学の研究盛んになると共に、仏教文化の芸術考古学研究等にもいろいろトルコ・イラン・イラクよりシルクロードを経てチベット・印度・中国へ、そして日本の正倉院を終着駅として世界の宝巻一堂に集結せられ、現代の奇跡といわれている。いやしくも仏教徒たるもの、この昭代に光輪を宣揚すべき一大責任を遂行させなければと、老の涙をぬぐいつつ、念仏の輪をひろげましょう。



を	こ
聞	法
く	語

聖の足跡を訪ねて

宝田正道

法然上人の人と生活(九)

法然上人は、前にも触れたように、いわゆる「無教会主義」を標榜せられた。「無教会主義」といっても、樹下石上を仮の住み家とする放浪の雲水や、旅から旅を渡り歩く勸化僧、旅僧の類のように、一定の寺院を持たないことをいうのではない。臨終の床で、高足信空にいわれたとおり(前号参照)、古来の先徳のように行く先々に寺を建ててそこを己れの遺跡と称するようなことはしたくない、という意味である。いうなれば、念仏の普及が限定され、人集って鬨諍の因をつくるような廟寺の建立は深く戒められ、あくまで「念仏の申されんやうに」諸州に遍満するように、「念仏の声するところ、すべてこれ予が遺跡なり」と考えられたのである。だから、この遺言を聞いた門弟たちの多くは、あるいは京に留

まり、あるいは鎮西へ走り、あるいは関東、奥羽の地まで、散り散りに教線を拡張して行っただけども、「遺跡」としての寺院を建てた人はあまりいない。常随弟子の一人源智のごときは、故上人の言を守るあまり、おのずから法談など始めても所化が五、六人も集るともはや鬨諍の魔縁をつくる懼れがあるといつてそれを中止したほどである(勅伝四十五)。

しかし、不幸にして上人の存命中に生れあわさず、その声咳に接することのできなかつた、後世の門徒たちにとってみれば、せめて上人の残された足跡や遺物などを拝みたい、という気が起きてくるのは無理からぬことである。そこで滅後何年か経つと、上人ゆかりの地を選んで寺院を建て、あるいは遺物を携えた門弟たちの寄遇地も含めて、あちこちに「遺

跡」と称する建物ができるようになった。いわば「つくられた旧跡」である。そして滅後五百年も過ぎると、これらの旧跡を二十五とか、四十八とか五十という法数にまとめ、順路をきめて巡拝するという、いわゆる「札所巡礼」という試みが流行し始めた。信仰に名を籍した庶民の観光旅行という傾向さえ見られる。こうして今日では、数千という浄土宗寺院の中には、何らかの意味で自坊こそ上人の旧跡だと因縁つける寺院も少くない。

上人の意に反して、こういう現状となったことは残念であるが、時代の移り変りに応じて布教の形がいろいろ工夫されるのは、むしろ自然のこととて、要は「念仏の声するところ」でさえあればこの趨勢も許されるのではなからうか。

ところで、これら「つくられた旧跡」のうち、上人在世中に実際に足跡を印された場所に限って時の移りゆく経過を追ってみたい。

上人の行動範囲は、地理的にみて、きわめて狭い。その遺言どおり、念仏の声こそ一天四海に及んだかもしれないが、実際に歩かれたところは、京畿を中心として、わずかに四国の高松へ至る往復の舟路周辺に過ぎない。むろん、奈良や伊勢、高野なども含めてである。

とりあえず、承安五年（一二七五）春、立教開宗を心に決め

られて以後、建永二年（一二〇七）、流罪に処せられるまで約二十年余りの間、上人はどんな足どりで、「遺跡」をつくって行かれたであろうか。伝説も含め、主として年代を追いつながら考察してみることにする。

まず考えられるのは、東山吉水の草庵であるが、その前に、長い間の黒谷籠居を終って叡山を下り、まっ先に訪ねられた西山の広谷のことを忘れてはなるまい。上人は、遊蓮房円照を慕ってこの地に一時止住された。ここが後（建久九年、熊谷入道蓮生によって師の旧跡とされ、粟生の報国山念仏三昧院光明寺（西山派四大本山の一）として現在に至った霊跡である（二十五霊場第十六番）。円照の没後、その房が東山に移されて、慈円の住んでいた吉水の草庵の一部中房として上人常住の聖域となったのである。現在時宗に属するが、知恩院の鐘樓堂の地続きにある慈円山安養寺がそれである。

上人は、以後三十年にわたり、この地を本拠として念仏の弘通に努められたのであるが、一説によれば、開宗早々、嵯峨小倉山のあたりに草庵を結んだり、その年高倉帝に対し授戒せられたのが大本山清浄華院（第二十三番）であると伝えられたり、伊勢神宮に百日参籠された旧跡として厭離山欣浄寺（第十二番）を挙げたりしている。

また、開宗二年後の治承元年（一二七七）春には、嘉応元年

(一一六九)に弥勒の出世にあうべく蛇身と化して入定した師僧皇門阿闍梨を追福のため、上人は遠く遠江の桜ヶ池(静岡県浜岡町)を訪ねられ、回向の後、阿闍梨の菩提所奥の院として菊川町の松風靈山護国本寺応声教院(番外霊場)を定められたという。その時の感懐を示す法語は、次のとおりである。

智恵ありて生死の出がたきことを知り、道心ありて慈尊にあはん事をねがふといへども、よしなき畜趣の生を感ぜること、しかしながら浄土の法門をしらざるゆへなり。源空そのかみ此法をたづねえたらましかば、信不信をかへりみずさづけ申なまし。

〔勅伝〕三十〕

寿永二年(一一八三)七月二十八日、木曾義仲の京都乱入によって一日聖教を見ざりき、と嘆かれた上人は、山科の日岡へ一時避難せられたとして、頂後山光照寺(番外霊場)があげられている。一説には嵯峨とか西山ともいわれているが、とにかくこの日前後は東山を離れて戦禍を避けられたと思われるのである。

そして文治元年(一一八五)には、慈円の招きによって大阪四天王寺に詣で、念仏堂(第六番)で念仏を修し、また茶臼山近くに庵を結び、「荒陵の新別所」として坂松山高岳院一心寺(第七番)を創められたという。後白河法皇とともに、入陽の沈む浪華の海を眺めて日想観を修せられたのは、有名な話である。

翌二年(一一八六)八月、大原の里勝林院(第二十一番)において、大原問答が行われ、上人は次のようにいわれたことも、周知のとおりである。

大原にして聖道浄土の論談ありしに、法門は牛角の論なりしかども、機根比べには源空勝ちたりき。

〔信寂房に示されける御詞——勅伝〕六〕

四年後の建久元年(一一九〇)二月、上人は、さきに辞退して代りに推薦した大勧進職俊乗房重源の請いを受けて、平重衡の焼いた東大寺大仏殿の再建の模様を見物かたがた南都に足を運び、いまだ半作り中の南廂で浄土三部経の講義を行われた。大仏殿の坂を下ったところにある指図堂(第十一番)が、その霊跡に擬せられている。

同じ年の秋、法相宗興福寺に属する京都清水寺において、上人は七日間の説戒を行われ、寺家の沙弥印藏その他の人々が深く本願を信じ偏えに念仏に帰したあとが、滝山寺阿弥陀堂(第十三番)として残されている。

後白河法皇の寵臣の一人伊賀氏は、丹後の久美庄の城主であったが、建久三年(一一九二)の一夏上人を特請してその春崩御になった法皇追悼の法要を厳修した。その寺が恵心僧都ゆかりの靈鳴山帰命院本願寺(番外)であったという。

法皇と上人との関係は、文治四年(一一八八)八月、如法經の先達となられたのをはじめ、法住寺の御所で内戒を授けたり『往生要集』をご進講申上げたり、臨終の善知識となられたり、まことに宿縁の多いことであったが、親盛入道見仏は八坂の引導寺(青竜寺)に上人を迎えて生前の法皇を偲び、建久三年(一一九二)秋、心阿、住蓮、安楽らとともに六時礼讃の行道を行なって七日間の別時念仏を勤めたという。

建久六年(一一九五)三月、東大寺の再建成り、その落慶法要が行われたので、上人は南都を訪れ、その帰途市坂の安養寺(京都府木津)へ立寄られ、またその足で木幡の里に庵を結んでいた三井公胤の弟子忍空のもとにもお留りになった。後にこれが京都伏見に移されて宝海山源空寺(第十五番)と称したという。またこの年、上人は高野山へ行って五輪塔を建

てられたとも伝えられているし(円光大師御廟)、熊谷寺も上人留錫の跡といわれているので、上人は健脚に任せてこの頃はずいぶんあちこちへ出歩かれた模様である。

熊谷蓮生房は、建久八年(一一九七)五月、父直貞の旧館の地(錦小路東洞院西)に一寺を建てて上人の御影を安置した。後内戦のため、再三移転せられたが、上人と蓮生の師弟愛を秘めて現在に至っているのが、嵯峨の熊谷山法然寺(第十九番)である。翌建久九年(一一九八)は有名な選択集選述の年であるが、それから五年後の元久元年(一二〇四)三月、後白河法皇の十三回忌に当って仏事を修せられたのが、天台宗妙法院に属する蓮華王院(三十三間堂)である。上人はここで浄土三部經を書写し、能声を選んで六時礼讃を勤行、ねんごろに法皇の菩提をとむらわれた。

翌元久二年(一二〇五)三月、南都橋寺ご参詣の帰途、香久山の少林院法然寺(第十番)へお立寄りになり、四月には、九条兼実の隠棲所として重修した愛宕の鎌倉山月輪寺(第十八番)に招かれて、いわゆる「頭光踏蓮」の奇瑞を現わされた。そして八月、白河の禪房(二階坊)に止住せられていた折、瘡病に見舞われた。その跡が今の紫雲山金戒光明寺(第二十四番)であるという。

すでに七十三歳の老齢に加えて、念仏の声が巷に高まるに

つれ、南都北嶺の彈圧もきびしさを増し、元久の法難を味われた上人の前途に、またしても一大災難が降ってわいたのは、翌建永元年（一二〇六）十二月のことである。すなわち、鹿ヶ谷法然院万無寺（新十九番）における住蓮・安楽らの不祥事件である。後鳥羽上皇が熊野へ参詣せられた留守中に、御所に仕える鈴虫・松虫という二人の女官が美声で六時礼讃を行ずる住蓮・安楽らに魅せられて出家剃髪したというのである。

このため、上皇の逆鱗に触れて住蓮は江川馬淵で、安楽は京の六条河原で、それぞれ断罪に処せられ、その罪は師の上人にまで及び、ついに建永の法難を惹起することとなった。同じ鹿ヶ谷にある安楽寺（番外）は、これら若い念仏者たちの供養塔やお墓のある旧跡である。

翌建永二年（一二〇七）三月十五日、俗名藤井の元彦として土佐に配流されることとなった上人は、小松谷の正林寺（第十四番）から流人の旅に上られるのである。この寺は、むかし「灯籠大臣」の異名をとった平重盛が、四十八間に四十八牀の仏像を安置して毎夕一牀ごとに四十八の灯籠をともして念仏行道に励んだという別邸（小松殿）の跡で、当時は兼実の山荘となっていた。上人は晩年、ここを終焉の地と考えられたのか、

千歳ふる小松のもとをすみかにて

無量寿仏の迎へをぞまつ

と歌われたのも、この地であったという。

兼実は上人との別れを惜んで、近くにある法性寺の小御堂に最後の夜をお留めし、両者の間に次のような歌のやりとりがあったことも有名である。

ふりすてて行くは別れのはしなれどふみわた
すべきことをしぞ思ふ（兼実）

露の身はここかしこにて消えぬとも心はおな
じ蓮のうてなぞ（上人）

かくて、翌三月十六日、上人は兼実はじめ信空その他の門弟ら多数の道俗男女がお見送りする中を、下鳥羽の南の門から川舟に乘られるのであるが、京を離れる最後の地で別時念仏を修せられたのが、伏見の一念寺（番外）である。

以後、流謫の地を目指しての行く先々で、上人の化導は続くのであるが、紙数の関係でその旅姿は次号で追うことにする。とにかくこの二十年余りは、若干の例外を除いて、すべて京洛内外が上人の足跡の中心であったことが、以上の叙述でわかることであらう。

四季の書



徳門普寂上人

△旧盆に憶う・持戒念仏の学僧の生涯▽

林 錦洞

(書道家)

上落しても、ゆっくり京のたたずまいに親しむ暇はないものだ。昨秋秋寸暇をさいて何時もの宿からさほど遠くはない洛北の「哲学の道」を散策した。なだらかな登り坂を鹿ヶ谷に向う。俊寛が鬼界ヶ島流罪の発端となった鹿ヶ谷の姿、清盛の権勢に対する抵抗が、八百年も前に此の地で秘かに行われたのかと治乱興亡、強者どもの夢のあとに人の世の流れを感じる。そぞろ歩きの思索懐古の道のりは、京ならではの情感であろう。程なく法然院に着いた。幽寂の言葉そのままの聖域である。

江戸中期浄土教団の頽廢俗化に警鐘を鳴らした捨世派

が持戒念仏運動を叫んだのは、この法然院を中心としてのことであると言う。捨世派と共に同じく持戒念仏を提唱垂範した興律派の学僧がいる。これが徳門普寂である。奇しくも旧盆八月十五日、伊勢桑名の真宗の寺に生れた。百六十八年前のことである。

上人が不能に当てた手紙がある。

「愚意申上候処今般御道愛之高懷被仰下

尚更慚愧之至」云々

とあるが、草書の連綿で淡々と書き流している。御道愛の三字など誠に見事な草体で、明るく澄んで懐の広い立

派なものである。長時院普寂の署名も手慣れた筆である。普寂字を徳門、道光と号したが、十六才、父秀寛から「お前は世間から竜駒と賞められるのをよいことに、碁将棋にうつつをぬかし勉強もしない。十五も過ぎて何一つ頭に残らぬような真似ばかりして、儂の顔に泥をぬるのか!」と大喝され、以来省悟して研鑽これ勤めたと言う。尤も生れながらに合掌していたと伝えられ、三才文字を六才浄土三部經を十才儒書を読んだ俊才である。

上洛してからの勉強振りは目をみはるばかりであった。河内法然寺の義雄と机を並べ勉強したが、食事と手洗の用以外は机を離れなかつたと言うから、その猛精進振りも想像出来よう。この為遂に病に倒れ、生死を怖れ病身で大業を全うするには無理となつた今、念仏門こそ我が進む道と悟つた。上洛が享年年間というから文化文政の爛熟頽廢の時代への前振れの頃になる。

三百文の路銀を懐中に上洛、高麟和尚に菩薩戒を受け、一日八万乃至九万遍の称名念仏行に入つた。念仏発心を喜んだ尾張西方寺関通上人の勧めにより、三河の崇福寺義燈律師にも参じて剃度受戒、名も慧謙と改めた。

多感な少年期、父の顔に泥をぬるのかと叱られた言葉が脳裡を離れなかつたに違いない。それにも増して資性英邁道心堅固な上人の根性、道念には唯々驚歎の外ない。四二歳京都長時院湛慧にも受戒している。先の手紙は此の頃のものか? 五七歳京を出て増上寺学寮も勤め、長泉院の開山となる。

天明元年八月十五日探玄記を講じ終つて病に臥し、次第に衰弱を示していった。弟子の鸞山が見舞に訪れた時「食もすすまず茶を飲むだけとなつたが、却て身も清く臨終も安静となることだから、昔から貴ばれている臨終の型で往生出来そう喜んでゐる」と告げた。そして一七日の別時念仏を臨終行儀にあてて修した。仏殿は山上に聳え寝所からは数十俵の回廊を渡らねばならぬ。臨終も近い上人は杖について毎日上殿した。この道心持戒堅固な姿は平生と変らなかつた。その勇烈胸を打つものがある。やがて上殿の気力もなくなり寝所に浄土曼荼羅をかかげ献香礼拝を勤行に替え念仏のみを口称するに至つた。三日後往生の旨を門弟に告げ最後の垂訓を与えた。「仏祖の命脈を統けるのが吾が素志、吾門下多く義学

をとり事行を軽んずるのはお前等の罪である。義学は目、事行は足、目足相い扶けて全うされるもので、義学あつて事行を欠けば浄土に至ることは出来ぬ」

暗誦の禪師、文字の法師の多い昨今、事行実践の緊要を説く上人の臨終の気迫、示諭甚だ切、門人感伏落涙して唯念仏の声のみであつた。同年十月十四日七十五歳で正念往生、笑うが如く身心柔軟、茶毘の後も舍利は光を放つて人を射たと言う。

壮年時代華嚴に熱中し、般若の理法を説きながらも、願生浄土に極まつた徳門上人の思索求道の過程は共感を呼ぶ。信じそれを解しやがて行じて証するという過程はすべてに通ずる理である。『浄土教の起源及び発達』の望月博士や『仏教経典概説』の椎尾博士、何れも不朽の名著である。義学に徹し事行勵行して口称念仏を全うされた御生涯は、今徳門普寂の臨終と思を一にして、一しおに称念念仏のスケールの大きさ、深さに唯々感伏するのである。

上人は実に四十部一四五巻の大著を選述、華嚴を初めとし、俱舍・唯識・起信論・法華撰論などの註疏であ

り、然も最後に願生浄土義二巻を著わし、

「汚れた此の世を深くいとい、十地の悟境を願うが、雑染を清浄も元来空中の画のようなもので、自証することは難かしい。このところを般若の理によって悟るべし」

と教えたが、最後には私の著わした願生浄土義に示した私の信念をよく守つて浄土に往生せよと教えている。

先にふれた不能に当てた手紙は寺開創の労苦を慰み、相互の弟子の消息を伝えているものだが、草体の流暢な流れ、肥瘦の変化、点画章法も的確で、根底に沈重さを藏しながらも浄土門らしい円満温雅な風格をしのばせる書風である。

ともあれ、八月十五日生誕し、七十四年の研鑽求道の末、八月十五日の同じ日に探玄記を講じ終つて病床に臥したまま、臨終を迎えた上人の奇しき縁、旧盆を前に、その道心持戒堅固な上人の御生涯に思をはせ、心静かに莊嚴浄土を祈るのである。そして末学の徒たるもの俗化に警鐘を鳴らした興律派持戒念仏の真意那邊にあるかを、熟考するのも、また真夏の清涼剤となるのでは!!



カナダインディアンの子供達、混血が多い
ようだ。(インディアン保留地にて)

カナダ雑感

佐藤 美智子

(鎌倉市長谷在住)

日本の二十七倍の土地に日本の五分の程度という人口しか住んでいないカナダに旅したのは、カナダの花が一斉に咲きそろってしまったかの様に美しい六月の初旬であった。

羽田からジャンボで僅か七時間半の飛行でカナダの西の玄関口バンクーバーに降り立った私達に、最初に目に入ってきたのが、空港内の移民事務所であった。今世紀になってから移民が非常に盛んになったということで、なる程と思う。空港内に居るのは日本の旅行者ばかりかと思われる程に閑散と

している。静かで清潔な国だなあという第一印象を受けるが、外人の姿(実は私達がここでは既に外人である筈なのだ)があまりに少ないので、まだ日本に居るような錯覚にとらわれてしまいうのである。カナダの人口の大部分は、このバンクーバーをはじめとしてアメリカ合衆国との国境に近い南部に、帯状をなして住んでいるといわれ、このバンクーバーはこれでもカナダ第三の都市なのである。

空港にいる外人(?)はカナダ国籍なのであろうか、イギリス系の顔、フランス系の顔、イタリア系、中国系と様々である。私達一行の中の着物姿を誰一人見るわけでもなく、どんな顔色の人が居ても皆当り前の顔をして何の関心も示さない。この人種の差異に対する無関心は、その後カナダに在る間中、常に感じられた事であったのである。

アメリカがくしゃみをするとかカナダが風邪を引くなどと云われるように、建国二〇〇年にならんとしているアメリカと

建国一〇〇年ちよつとの歴史を持つカナダとは、五〇〇〇キロの世界最長の無防備の国境線によつて南北に分たれているが、この二つの国では歴史上それぞれ別の壮大な実験が進行中と見られている。アメリカ側のそれが「人種のルツボ」と云われるのに対し、カナダ側の実験は「人種のモザイク」と呼ばれる。カナダには過半数を占める民族集団がなく、イギリス系が四〇％、フランス系が三〇％、残りはドイツ人、イタリヤ人、ウクライナ人、オランダ人、カナディンディアンやエスキモーなどの原住民、その他雑多であり、それぞれの文化をそのままの形で持ちこんでいるのである。言葉も英語と仏語の二国語が公用語であり、その他種々雑多な言葉が聞こえてくる。アメリカは色々な文化をアメリカ的生活様式の一つのルツボの中に溶かし込んできたえ直そうとするが、カナダのそれは一つずつの色をそのまま生かしてモザイクの中にはめ込む。多様な文化を多様なままに保つことによつてカナダ文化の要素にしようとする。

それは、バンクーバーの通りをちよつと歩いてみれば、五分と経たない内に理解出来る。ほとんどの日常用品は全部輸入品である。アメリカ製、フランス製、イギリス製、香港製、韓国製、インド製等々ほとんど世界のあらゆる処のものが仲良く並んでいる。勿論日本製もオンパレードである。ショー

ウインドウに日本の渋い色合いのドンブリがきれいに並べられていることも珍しくない。又、モントリオールなどの街角の交通標識には stop と arrow と両方書かれている。

この色どりこそ豊かだが、寄木細工のもろさを持つカナダのモザイクが、南の巨大なルツボの中に引きずり込まれもせずに生きぬいてきた事実こそがこの国のドラマだと云われている。確かに歴史上に世界に知れ渡るようなドラマティックな事件もないから、私達日本人にはカナダの印象は非常に淡い。私も今回旅行するに当り、いざとなるとカナダに関して何ら知識を持ち合わせていなかったことに今更ながら驚いたのであった。

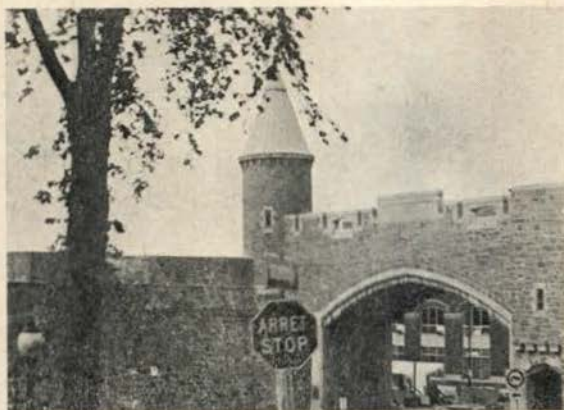
モントリオールで開催されたロータリークラブの世界大会に参加する為に渡ったカナダで私達が今回訪れた処は、本当にアメリカとの国境線に近いところばかりであった。西からバンクーバー、英国調の街並のヴィクトリア、カナダ第一の観光地で世界的なリゾート地と呼ばれるバンフ・ジャスパー・ヨーホーなどに代表される雄大なカナディアンロッキーズ国立公園、ナイアガラに近いカナダ第二の都市トロント、そしてカナダで最も古く、今だにフランス語ばかりの古い城壁都市ケベックなどである。

出発前に地図を調べてみると、アメリカとの国境線の延長

がちょうど樺太にぶつかる。六月とは云え、さぞ寒いのではないかと心配したが、着いてみて、気温とは緯度ばかりで判断すべきではないのだと、当り前の事が実感として捉えられて感心したりする。バンクーバーを囲む遠くの山々は皆雪をいただいているのに、何と穏やかな気候なのであろうか。



バンフ・スプリングホテルからの眺め



城壁都市ケベックの城門と英仏二ヶ国語の交通標識



前庭を花で飾ったモントリオールの美しい住宅街

カナダに降りて最初に触れた空気のやわらかさは今だに忘れることが出来ない。夏服又は合服にカーディガンとレインコートを用意さえあれば充分である。場所によってはカナダの冬の寒さは大変きびしいと云われるが、六月に訪れた私達は、このやわらかな優しい澄んだ空気と抜けるような青空



カナディアンロッキーの氷河 (道路がよく整備されており、容易に行くことができる)

と素朴で質素なことか。若い人はほとんどTシャツとジーパン。年輩の婦人でもブラウスにパンタロン程度、お洒落には余り関心がないかの様である。人口が少ないから人を押しのけて目立たせる必要がないのであろうか。目まぐるしく流行を追いかける日本の若者達の心理とそれを利用する狡猾な商

と、癖のない美味しい水の恩恵を絶えず享樂する事が出来たのであった。日中はシャツ一枚、夜は毛皮を羽織っても可笑しくない気候であるから、デパートには夏物、冬物が一緒に並べられている。

しかし日中街中を歩いている人達の服装の何

法の日本をすぐに比較して考えてしまう。カナダ人には、全ての面に於て、聞いてくれ、見てくれよがしの見栄やはったりが全然見られず、実におっとりとした性格を持っている。それはカナダの歴史上に大英雄も大芝居も生まれなかったのと相通ずる。カナダ人は、遠い祖先がきびしい大自然の中で危険と孤独にみちた時間に耐えぬいて来た生き方、つまり、大自然の中に身を置いてその孤独感で心を洗い清めて行く自然への素朴な畏敬の哲学を伝統的に受けついで生きている様に感じられる。だから、そこに生まれる平凡な人間らしい常識と、互譲と寛容の精神を持っている。それは、地下鉄に乗っても、バスに乗っても、人の心がおだやかで先を争う風風が全くなく、飾り気がないことが感じられるのである。

カナダの原住民達や、「ヴォアアイアジャー」とか「森を走る男」などと呼ばれる初期の開拓者達は、白樺の皮で作ったカヌーで水を渡り森を走りぬけて奥地へ奥地へと入って行った。だから現在でも大きなリニックスバックを背負って山を歩き、カヌーをかついで昔のヴォアアイアジャー達のように自然の静寂の中に入って行く若者が多いが、その自然は日本で接することの出来る自然とは完全にスケールが違うのである。カナディアンロッキーの山々には何万年も前の氷河がそのまま残っているような、恐しく息の長い自然なのである。民族

の集団でお互に相害う事がないように共存しようとする知恵をカナダはそのような大自然から与えられているように思う。シートンの「動物記」が子供達に深い感銘を与えるのは、シートンがカナダのきびしい大自然の中に育ち、人間も動物も大自然の一部に過ぎないという、大自然に対する動物同志の共感があるからであり、カナディアンロッキーを旅行している人とカナダ人が如何に動物を自然を大事に保護しているかが良く分る。バンフ国立公園の入口には威厳のある門があり、草花をつむと五〇ドルの罰金、動物に勝手に餌をやると五〇ドルの罰金をとられる。二、三年前の大雪でロッキーの動物達が餌に困った時には、空から餌を撒いて動物達を助けたという微笑ましい話をバスの運転手さんからも聞いた。

しかしカナダでは、この大自然を保護すると同時に、人間がなるべく簡単にこの大自然に参入出来るようにと細心の努力が払われている。完璧に舗装された広い道路が、数知れない氷河を眺めながら走れるように、大水原にまで通じており、キャンピングカーやハイカーが休めるように、あちらこちらに、調和よく木のテーブルと椅子が置かれている。

カナダに於てもまだまだ「縦のモザイク」があるという内部批判もあり、フランス・ナシヨナリズムの問題もあるようであるが、カナダ人の背後にある途方もなく大きな大地が、

人間をその貪婪さやみにくさから救っている事は疑いない。この国の実験は、これから増々狭くなりつつある世界の人間の生き方の指標になり得る事であろうし、それ故に二十一世紀の国と呼ばれるのである。この大自然と調和する心がある限り、多種多文化の混成で国が成り立ち、お互に相犯さない世界が出来るのではないだろうか。世界の理想郷を作り出せるかどうかカナダの実験は大きな意義を持つていと云えるだろう。カナダで至る所に国旗が掲げられているのは、新しい国の誇りを示すものなのかも知れない。



世界一美しい湖といわれるレイク・ルーズ



釋教
歌集

續々法の衣に就いて

一附・高島式部小傳一

第三回

石 島 俊 徳

(大津市石山・浄光寺住職)

第三節

但三心四修と申事の候は、皆決定して、南無阿弥陀仏にて往生するぞと、思ふ内に籠り候也

続々法の衣

(高島刀美子詠)

一三九 た 頼むぞよ浮世に満ちて有明の

照らしまします法の御影を

一四〇 た 滝津瀬の何処よりかは法の音の

頼む方にや流れ行きけん

一四一 さ さざ波のよる昼よせて大海の

ひらに伏しつづ猶頼ままし

一四二 む 結ばれて必らず濁し濁すなよ

心にてとけ法の真清水

一四三 し 死ぬるとは思ひ嘆かじ極楽に

弥陀にひかれて生れ行く身は

一四四 む 無量寿の声きこゆなり法の友

- 一四五 し もらさで共に願ひ行かまし
 知る知らぬひとつに法の蓮葉は
 露ばかりだに心へだつな
 一四六 し 白雪も御法の春に遇はざらば
 つもり積りて消ゆ事もなし
 一四七 ゆ 豊かにも昇る朝日を見ても知れ
 永劫に入るいつはりのなき
 一四八 と とことは花や空^{そら}薫き奉る
 かをりや法の台むすばん
 一四九 ま ます鏡かげを照らして真心に
 法の池水清くむすばん
 一五〇 う 浮世にはかへらぬ水の心にて
 末大海の塵なくもがな
 一五一 す 救ふとの法の誓ひぞ有難き
 何かは外に罪深き身を
 一五二 こ この法は外に求むる事ぞなき
 唯阿弥陀仏といふばかりなり
 一五三 と 年寄れば果なき事の多かりき
 それにつけても願へ弥陀仏
 一五四 の 残し置く物は一つも頼まれず
 たのみ頼むは行末の弥陀

- 一五五 さ さのみ今頭も剃らず身も染めず
 称へば直に法の道人
 一五六 ふ 不思議にも空に導く声ありて
 南無と力の入る^い人をひく
 一五七 ら 濫觴を尋ねても誰知られねば
 末弥陀仏に任せはてん
 一五八 ふ 再びと帰らぬ今日の空の雲
 はかなや山に入相の鐘
 一五九 も ものに触れことに触れつつ耳口に
 らうなき弥陀の御名となへかし
 一六〇 み みる内にひとり独りと弥陀の国
 ただ一筋に踏み迷ふなよ
 一六一 な 何事もすてて行く身ぞ今^{いま}爰に
 迎ひ来ぬれば待ちてくれぬぞ
 一六二 け 今日も亦御法の露を命にて
 ひと日のびたる青柳の糸
 一六三 つ 妻も子も事なくけふを暮すこそ
 世を照る法の光りならずや
 一六四 し のすだれ仏ならでは隙も見ず
 まき上げぬ間になびき行く世を
 一六五 や やもすれば怠りにけり祖師の影

一六六 う 弥陀の誓ひの南無阿弥陀仏
嬉しとも喜び勇め此の世から
一六七 し 弥陀の誓ひに漏れぬ此の身は
しみじみと御前に向ひ称ふれば
いや尊さの身にぞ知らるる
一六八 て 手に結ぶ軒の清水のひと露も
みのりに漏れぬ恵みをぞ思ふ
一六九 な 難波江の芦間によしや生れても
仮りの浮世を忘るなよ夢
一七〇 む 六百の五十の昔くりかへし
御影を仰げ賤のをだ卷
一七一 あ 仰ぎ見れば南無阿弥陀仏の光より
頼り依るべき影はあらじな
一七二 み 身の罪は昔有りとあらためて
仏の慈悲を笠にきてゆけ
一七三 た 尊さを知れば知る程おふけなし
知らぬもよしや南無阿弥陀仏
一七四 ふ 二つなき法の一道行きまよひ
いくらん原になづみはつらん
一七五 つ ら連と野行き山行き里を行き
ひかるる舟に岸近くなる

一七六 に にはつ鳥八声にたてよ人毎に
浮世の中の夢さますまで
一七七 て 寺々の鐘の響きも南無阿弥陀
寂滅為楽と有難く聞け
一七八 わ 驚の山くまなく昇る月見ても
法の光りのさやけさぞ知る
一七九 う 浮き沈み有るも世の中渡り川
弥陀頼み行く身こそ安けれ
一八〇 し 白雲の立ち迷ふ身のはかなさよ
やがて消え行く身とも知らずで
一八一 や 八重むぐら茂れる庭の露の身も
称へば弥陀の影はさしけり
一八二 う 驚もみのりをうたふ世の中に
聞き得ぬ人は哀れなりけり
一八三 す 墨染に袂の色はかへてしも
猶そめがたき心なるらん
一八四 る 類をこそ求めて誘へ人は皆
仏の縁のなき人やなき
一八五 そ それとしも教へずに行く法の道
我れ弥陀仏の声を知るべに
一八六 と 称ふべし誠より出す一声は

石にたつ矢のとをらざらめや

一八七 お 奥山にのがれ入るとも中々に

心は苔の下にいるべき

一八八 も 物言へば唇寒し阿弥陀仏は

称ふる程に心のどけし

一八九 ふ 古りにける我が世の末もいかばかり

早く願はん南無阿弥陀仏

一九〇 う 薄墨の夕べの雲に有難き



式部九十六賀肖像（明治十三年写）

御影ぞやがて見ゆるなるらん

一九一 ち 散り果つる木の葉を見ても哀れこの

浮世の人も果ての木枯らし

一九二 に 西向けば唯父母の在す方と

思へばいと頼まれぞする

一九三 こ 心よりつくる地獄をつくるなれ

願ひて行かん極楽にして

一九四 も 物事に憂きも辛きも世の習ひ

なれなれ称へ唯阿弥陀仏

一九五 り 竜の雲虎の嵐もけす物は

誠に称ふ弥陀の一声

一九六 さ 咲匂ふ弥陀の御国の花蓮

春に秋にも散らぬなりけり

一九七 ふ 古簾掛けはなれたる方でなし

頼む一重や弥陀の極楽

一九八 ら 老若や貴賤へだてぬ本願に

摂取不捨とは有難きかな

一九九 ふ 不可思議の法の恵みを受くる身に

生かし甲斐なきしめじ野の草

二〇〇 な なをざりに摘み捨て来ししめじ野の

草々に法はありと和らずで

二〇一　　り　　律義にて正路正直一べんの

誠にいたせおらが^{おん}念仏

(附)　式部の多芸多能

式部は天性まことに器用な質で諸芸に達し、書は庭田從一位重基卿(天保十一年薨)に学んだと伝えられる。式部は九十七歳という長寿を保ち、その書き残したものは頗る多い。明治十三年「九十六賀」の時の配り物として、記録に残っているだけでも、短冊一五四枚、半切画讃六〇枚、小品画讃五六枚が数えられる。要するに、筆まめでもあり、また自信もあったらしく、短冊の如きは数千枚にも及ぶであろう。しかも驚くべきことには、九十歳を越えてもいささかも筆勢に衰えを見せず、調達自在、最晩年の九十六、七歳のものが最もすぐれていると思われるという。

画は夫清音と同郷備前の画人浦上春琴に学び、自画讃の各所に散在し、その自撰家集『麦の舎集』の表紙に描ける麦の絵は自筆である。明治九年六月、九十二歳の時、京都博覧会に『水墨画紙鳶図並自詠和歌』を出品して、「精巧ナリト認ム」という賞状を受けているという。画も亦書と同じく晩年に至るも、その筆勢には驚嘆させられる。

歌道に式部が志したのは、割合におそい。『桂園入門名簿』

によると、「天保二年五月九日、景樹の門に入る」とあり、四十七歳のことである。ところが、天保十二年には夫清音が歿し、同十四年には師景樹大人が歿したので千種有功卿に師事することになった。

桂門に出で、有功に従った式部は、交友の範囲が広く、能谷直好、蓮月、渡忠秋とは特に親しく、その他女流では松原三穂子、松尾多勢子なども交渉があった。

諸家の式部評では、式部の歌には概して題詠歌多く、実感のもの少なき観があるのは甚だ物足りないが、景樹や有功に師事しただけに、その歌は巧みであると。また式部の歌は沈吟というよりは、興にまかせて詠み出づるといふ風があつて、深味に乏しい。彼女の名の喧伝せられたのは、その人物、性格による所が大である。また尚今後の検討にまつ所多し。

式部の歌集の主なものを示せば

一　麦の舎集

自撰家集である。文久頃、植松雅恭にすすめられて一旦成稿し千種有文の序を得たが、元治元年甲子の兵火の厄に遇つて焼失、慶応三年帰洛して錦織に住んでから、再び稿をなした。自らの跋に

慶応四年卯月の初めに物し終へぬ。洛の東錦織の里に住
八十四姫式部
とある。

二 日々詠艸

半紙の反故を打返し、三十枚を綴ったもので、「明治四年
末、正月より日々詠艸式部」とあり、ほぼ一日二題の割で、
元旦から翌五年一月十六日まで続けられている。他に發表す
るという如き意図は見えないが、その努力は驚嘆に価しよ
う。歌は七三一首。

三 続々法の衣

別記、本文の如し。歌数三四〇首。

四 かたみの厥（一〇九首）

これは、養嗣子千畝が、式部の十七年の忌辰に刊行したも
ので、千畝の序があり、本文は十丁、他に税所敦子の跋一丁
と奥附がある。内題に「論語章句の歌、志貴婦遺稿」とあ
る。

五 蓮月式部二女史和歌集抄

これは編者未詳。明治元年十二月、金屏堂発行。本文は十

五丁。歌数は蓮月四九首、式部五〇首である。

茶道は、速水宗達宗匠（裏千家、養寿院）に、琵琶は綾小
路有長に、笙は林広守の父広済に就いて、何れもその奥儀を
極めたという。

尚一時式部は刀剣をも鍛ちしことありしが、注告する人あ
りて、以後専心彫刻に志せしと。

彫刻は細刻を得意としたようで、明治九年明治天皇入洛の
際には、高崎正風の手を経て、竹の筆筒を献上、御嘉納にな
り白絹一匹を賜わったというが、その筆筒は幅一寸五分、長
さ八寸ばかりなるに、古今集並に新古今集の歌各百首を五段
二百行に自刻せるものである。

蓮月尼の陶芸蓮月焼、望東尼の押絵細工、嵌込^{はめこみ}細工に対
し、わが式部は平生ひそかに自ら木竹象牙などに彫刻をな
し、これを売って生計を助けたり。誰を師として学んだとい
うのではないが、その彫りし山水人物花鳥の如きは、刀法精
緻氣韻飄逸にして、古舶載品に較ぶるも更に遜色なかりしと
いう。

また、別の伝えもありて、式部は縫針をもって竹や木に簡
単な彫りをしたと伝え、製作品はかなり無造作に、沢山残し
た筈と思われるが現在残っているものは極めて少いようであ
る。

（つづく）



インドのことば

松 濤 泰 雄

(大正大学大学院・梵文学専攻)

インドは、今なおその無限にも等しい時間と空間との内に、様々な習俗、宗教を背景として、そこに住する諸民族の識りなす一大叙事を我々の眼前に、いつ終るともなく繰り広げている。このような状況にあるインドに於て、今現在話されていることばは、近年の国勢調査によれば、総計千六百五十種にもものぼる。また系統的分類によれば、それらのことばは、南インドを除いたインド半島の大部分で使用されているインド・ヨーロッパ諸語、南インドで使われているドラヴィタ諸語、中央アジアの原始的な人々の話すオーストロ・アジア諸語、ヒマラヤ山麓等で使われているチベット・ビルマ諸語の四種に大別される。

さらに鳥瞰図として眺めた現在のインドの住民は、わずかな仏教徒、ジナ教徒、拝火教徒などを除けば、ヒンドウ教徒とイスラム教徒との二つの大きな集団に分類される。

イスラム教徒は、イスラム文化の影響の色濃く残っている、ペルシャ語とヒンディー語との融合語であるウルドゥ語を話している。このウルドゥ語は、インド・ヨーロッパ語の一つに数えられる。

ヒンドウ教徒としては、北インドを中心とするアーリヤ人種と、南インドを中心とするドラヴィタ人種の二つの系統がある。

アーリヤ人種とは、サンسكريット語・ブラークリット語

《インドの文字のいろいろ》

タミル語

தேவன் தம்முடைய ஒரேபேருண குமாரனை விசுவாசிக்
கிறவன் எவனோ அவன் கெட்டுப் போகாமல் நித்தியஜீவனை
அடையும்படிக்கு, அவனாத் தந்தருளி, இவ்வளவாய் உல
கத்தில் அன்புகூர்ந்தார்.

マラーヤラム語

തന്റെ ഏകജാതനായ പുത്രനിൽ വിശ്വ
സിക്കുന്ന ഏവനും നശിച്ചു പോകാതെ നിത്യ
ജീവൻ പ്രാപിക്കേണ്ടതിന്നു ദൈവം അവനെ
നഷ്ടവാൻ തക്കവണ്ണം ലോകത്തെ സ്തംഭിച്ചു.

オリヤー語

যেহেতু বহুসংখ্যক দেবদেবী ওয়াও যেন দেবে দেবে দেবে দেবে দেবে দেবে দেবে
করে দেবে; ওঁহঁদের দেবে দেবে ওঁহঁদের দেবে দেবে দেবে, দেবে দেবে

ベンガリー語

காரண சேஷர் ஜாதகே அமன ச்ரேம கரிலன யே, அபாநார
அகஜாத பூஜகே தான கரிலன, யேன, யே கேஹ் தாஹாதே
விந்நாச கரே, ஜெ விந்நே நா ஹ்ய, க்ஷி அந்ந ஜிவந பாய்.

ヒンデイ語

क्योंकि ईश्वरने जगतको ऐसा प्यार किया कि उसने
अपना एकलौता पुत्र दिया कि जो कोई उसपर विश्वास
करे सो नाश न होय परन्तु अनन्त जीवन पावे।

パンジャビー語

ਕਿਉਂਕਿ ਪਰਮੇਸੁਰ ਨੇ ਜਗਤਨੂੰ ਅਜਿਹਾ ਪਿਆਰ
ਕੀਤਾ ਜੋ ਉਸਨੇ ਆਪਣਾ ਇਕਲੌਤਾ ਪੁਤ੍ਰ ਦਿੱਤਾ ਤਾਂ
ਉਹਨੇ ਜੋ ਉਸ ਉੱਤੇ ਨਿਰਭਾ ਕਰਦਾ ਹੈ ਉਹਦਾ ਨਾਸ਼
ਨਾ ਹੋਵੇ ਮਗਰੋਂ ਮਨੁੱਖ ਜੀਉਣ ਪਾਵੇ।

・アバブランシヤ語という、インド古典文化を華やかに飾ったことばの延長上にある、インド・ヨーロッパ諸語を話す一群のことを指す。そのアーリア人種の内では、西

部地方では、かつてシク教徒の聖典のかかれた二千万人の人々の話すパンジャビー語、ヒンドスターニー語やブラジュ・パーシヤ語等をその内容とする西部ヒンデイ語がある

り、東部地方には、北インドの聖典といわれる「ラムチャリット・マナーサ」で有名なアワディー語をその代表的なものとする東部ヒンディー語、千五百万人に使われているオリヤー語、四千万人以上が使用しているビール語、著名な詩人タゴールを生んだ六千万以上の人々が使っているベンガル語があり、中西部地方には、アブランジャ語と密接な関係があると思われる千五百万人の使っているグジャラーティー語、二千五百万人が使っているマラーティー語などがある。

南インドのドラヴィタ人はドラヴィタ諸語を使用し、その内では、最も長い歴史をもつ二千万の人々の使っているタミル語、二千五百万人の使っているテルグ語、一千万人の使用しているマラーラム語、千五百万人の使用しているカンナダ語が代表的なものである。

これらはあくまで概括的な分類であり、大都會においては種々なことばが氾濫しているし、一つのことばは、さらにまたいくつのかのことばに細分化されるのである。ところで、これらのことばの内でも多数の人々（全人口の四割以上の人々）に使用されているのが、ヒンディー語であって、政府の公用語として重要な地位を占めている。だがガンディー等の努力もむなしく、ヒンディー語は、一ルピー紙幣の上に見い出されるインドの十五の主要語の内の単に一つであるにす

ぎず、英語との併用がおこなわれている。さらに各地方の多数の文盲な人々は、その地方の方言のみを使って生活しているのが現状でもある。

この故に、英国の長期にわたる支配の残影としての英語は、その母語を異にする知識階級の人々の会話においてとか、あるいは一部の例外を除いた大学教育においてとか、種々な場合においてその実用的価値を失っておらず、幅をきかせているのである。

しかしながら英国のインド支配の過程において、英国より導入されたヨーロッパの近代文明と、ヨーロッパの文明の光で自己を照らし、近代化運動に進んでいったインド知識人達との力によって、散文の普及ということばの近代化の動きがあったということも見逃せない事実である。

次に、インド文化の輝しき遺産として手許にある、大乗仏教とも関連のあるインド・アリアン語の歴史について、ヴェーダ語、サンスクリット語、ブラークリット語、アブランジャ語の順によって、少しく眺めて見たいと思う。

インド・アリアン語とは、英語、ドイツ語、フランス語をも包括する世界有数のことばであるインド、ヨーロッパ語族の内の、インド・イラン語派に属することばである。このことばはインドの土着のことばではなく、中央アジア方面か

ら、イラン地方に向かった人々と別れパンジャブ地方に侵入して来た民族のことばである。古代インド・アリアン語の最も古い部分が、インド最古の文献であるヴェーダ聖典に用いられたヴェーダ語であり、これは古代イラン語のアヴェスタの中のことばと類似点が見られる。インド・アリアン語の新しい部分が、古典サンスクリット語、又はサンスクリット語とよばれているが、ヴェーダ語を含めてサンスクリット（梵語）と総称されることもある。

このヴェーダ語は徐々に変化を遂げて、前四世紀に大文典家であるパーニニ等によって古典サンスクリット語の基礎づけがなされ、サンスクリット語の標準的な文法が確定されるに至り、二千年後の今日まで、サンスクリット語の変化というものは、大筋としてほとんどないのである。その故に、かつてのインドの文学者達は、その限定された文法の範囲内で著作をすることをよぎなくされていた。主として書かれたことば（文字）としてではあったが、サンスクリット語は、インドの宗教、哲学、文学を表現するための標準語として大きな役割をはたしてきた。

サンスクリット語は元来バラモン教と密接な関係をもつことばであったが、仏教徒もはじめに使っていた中古インド語の代りとして徐々にサンスクリット語を使用するようになって

た。例えば仏教詩人馬鳴の著作はその代表として上げられるし、アビダルマ仏教の内の説一切有部の聖典の一部とか、大乘仏教聖典とかが、サンスクリット語をその用語として使用している。しかしながら、仏教聖典の内には、「浄土三部経」の内の「阿弥陀経」や「無量寿経」のサンスクリット語原典をもその内に含んでいる。

サンスクリット語が古代インドに於ける標準語の代表であるのに対して、口語の方言を基礎にして発達したことばがブラークリット語である。サンスクリット劇において、王侯とかバラモン以外の登場人物が語ることがブラークリット語であるということが、ブラークリット語とサンスクリット語との一つの相違点の暗示となると思われる。このブラークリット語の古い形は、アショカー王の碑文に、パーリ語の仏教聖典の内に、ジナ教徒の聖典の内に、見出すことができる。パーリ語の聖典の内には、多くの仏教徒の愛誦する、仏教最古の聖典である「ダンマ・パダ」、「スッタニ・パータ」なども含まれている。

以上の様なサンスクリット語とブラークリット語を除外したものが、アバブランジャ語と総称されるもので、地方の方言が基礎となつて発達したものであり、中期のインド語と近代インド語の中間に位置される数種のことばのことである。

念佛ひじり三國志

(七)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

生仏はいぶかった。平家の若將軍である重衡が南都の僧兵を攻めるのに、なぜこんなに氣重くなるのだろうか。わざわざ自分如き者のところへ話にやってきたのだろうか。

氣重くなった理由を、重衡自身もよくわかっていないようであった。

何となく嫌な氣分がするらしい。

「父相国は憎つくき南都の坊主どもを一人残らず殺せ、とおっしゃる」

「……」

「仏につかえる坊主を殺して、たたりはないものであらうか」

「しかし敵は衆徒どもであって、興福寺や東大寺のひじりではございますまい」

「それはそうだが」

いつになく氣落ちしている。

短い期間の觀察だったが、平家一門の公達のなかでこの重衡こそは英氣颯爽、また武者どもから慕われる戦さ上手であった。

「それほど氣重であれば、ご辞退申上げたら如何ですか」

「うむ……昨夜からそれは何度も考えた。しかしいま、父相

国の考え方は間違っていない。源三位頼政の隆起は、その火もと自体は小さかったが、及ぼすところは意外なひろがりを持つている」

重衡は明敏な情勢分析をやつてのける。

各地で反平氏の叛乱がおこっている。伊豆では左馬頭義朝の遺児、源家の嫡流頼朝も旗揚げしたそう。木曾では義仲をかついで山岳バルチザンが行動している。

いずれも微小な勢力だが、「平家に引く」などとは、つい昨年まではあり得なかった行動なのである。

あり得ない蜂起——これは時代が急角度で屈折しようとする現象だ、と重衡は分析する。

根っ子を排除しなければならぬ。

その根っ子こそ南都の堂衆なのだ、と父清盛は考えている。だから奈良の坊主どもを一人残らず殺せ、と重衡に下命した。

「山や野で戦さをするのはいい。嫌なのは奴らが立てこもるのが南都の街であることだ。廬舎那仏をまつる大仏殿を陣地にするかも知れない」

と、重衡は暗い表情をむすんだ。

兵火が仏像や伽藍に及ぶことを、この公達は恐れている。

と、生仏はその心事を読み分けた。そして余計なことを言

前号のあらすじ

三位中将平重衡夫妻のもとに暮す盲目の琵琶法師生仏のまわりでは、平家一門の時々刻々の動きがあった。治承三年（一一七九）七月、平相国清盛の嫡男、重盛が四十二才の生涯を閉じる。良識を失った清盛の暴走ははなはだしく、その年の秋には後白河法皇を鳥羽殿に幽閉し、政局をますますわがものとして行つた。こうした中で、翌治承四年五月、後白河法皇の不遇の第三皇子以仁王の令旨をもって源三位頼政を首魁とした叛乱が起る。世にいわれる「宇治川の戦い」であった。

その頃生仏は、東山吉水の禅室に移つて来た法然房源空をよく訪れた。法然上人は遊蓮房円照の死を契機に西山広谷を離れ、念仏信仰をより弘めるために、市井の一遇に庵室を設けていたのであった。

つてしまった。

「しかし近年では、南都北嶺の衆徒が各所の仏像や伽藍を焼いています」

と、実例を列挙した。

長寛元年の六月には比叡山の僧兵が円城寺を焼き払った。

翌二年三月、興福寺の衆徒が喜多院、円城坊を焼いた。永万元年には延暦寺衆徒が清水寺の本坊を、仁安二年三月には興福寺の前別当恵信が、現別当尋範をおそつて大乗院を焼い

＜諸寺焼炎＞



た。高野山の衆徒にしても安元元年には根来山をおそって堂宇を焼き、つい昨年この八坂の引導寺だって五重塔を祇園僧に焼かれているではないか。

重衡の面上から憂色が次第に薄れていった。

むろん盲目の生仏には、その変化は確認できない。声の調子で生気を取り戻したことがわかった。

後年になって生仏は、この朝を思い出して後悔の念で苦しめられた。

重衡があればど南都攻めを嫌がっていたのに、それも出家した身の自分がなぜ勇気づけるような資料を並べ立てたりしたのだろうか。一ノ谷の合戦で虜囚となった三位中将重衡は、敗軍の將に「仏敵」という忌まわしい罪名までかぶせられてしまったのだ。

しかし後悔はしても生仏はこの「仏敵」には賛同できなかった。南部の堂衆どもは権勢欲のために各所で仏像や伽藍を焼いているではないか。「仏敵」という点ではそちらの方が罪深い。

重衡は一人の軍司令官として、たまたま南都炎上に責任を取らされてしまったのである。

これは政治、軍事の問題であって、宗教とはつながりが薄いと言えるだろう。

むしろ生仏の胸にきざした後悔の念が、琵琶物語「平家」のなかで重衡の悩みを美化し、誇張したと考えられなくもない。

「だが生仏よ、この世はゆく末、どうなるのであろうか」

座を立て、観音堂の外に出た重衡はふと立ちどまって問いかけてきた。

「この世のゆく末でございますか」

「わしには何もかもが衰滅してしまいそうに思われてならない」

「衰滅ですか……私にはそうは思われませぬ」

「というところ？」

「衰滅はとくに始まっております。生きることそれ自体が、すでに衰滅ではないでしょうか」

「うむ……」

重衡はじつと盲目の若者を見すえた。その視線を生仏は、肌で鋭く感じた。

「盲目の私には最初から明るい世界なぞなかったのです。いつも暗く、衰滅の底を這いまわって生きてきたのです。衰滅を予感できるのは、左馬頭さま、あなたが幸福すぎる環境だからでございますよう」

「……」

「あなただけでは足りない。平氏のご一門すべてが」

「わしらは幸福すぎるのか」

「私がよく出かけるこの東山の上に住んでおられる法然上人がよくおっしゃられます。比叡山横川の恵信僧都は往生要集をお書きになりました」

「あの書なら、わしも読んだことがある」

「往生要集にはくわしく地獄の様相がえがかれている。極楽浄土に救われることよりも地獄を見つめる恵信僧都の眼の方が光っている。と法然上人はおっしゃっています。それはなぜか。恵信僧都ご自身が、その環境が榮光に包まれていたからなのです。盛者はたくましい感覚で滅びの姿をとらえるのでございます」

「盛者は滅びの相をよくとらえると申すのか」

「榮光を知らぬ者は、ひたすらに救いだけを希求いたします。地獄相なぞは自分の周囲にころころしている。だから光り輝く極楽浄土だけを見つめようとするのです。法然上人はおっしゃれました。自分らには地獄なんか見たくもない。阿弥陀如来の慈悲を、その愛情だけを信じ、求めるのだと」

「生仏よ。わしもおぬしのように盲目に生まれたかった」

太い吐息とともにこんな言葉が重衡から洩れた。

「何をおっしゃいますか。私なぞは、ひと目でもいい。自分

の生きている世界がこの眼で見られたら、と思わぬ日夜は一度だってないのですよ」

「つまらんことを口走って悪かった」

素直に重衡は詫びると、重い足どりで引導寺の境内を去っていった。

二

治承四年も暮れようとする十二月。冬の訪れた奈良は、この年格別に底冷えがきびしかった。春日山を酷烈な北風が吹きわたってゆく。やがて白雪が舞ってくるであろう。

正月の節会が数日後だというのに興福寺では式儀の準備など誰もしようとはしなかった。僧房にまともな僧侶の姿がないのだ。武装した衆徒たちが満ちあふれている。

連日の軍議であった。

この軍議には東大寺からもおもだった僧兵の隊長がやってきて加わった。

平生、興福寺と東大寺の衆徒は殆んどまじわらなかった。対立していたのである。

対立は冷泉紀の安和元年（九六八）に発するから古い。原因は寺領の争いだ。後朱雀紀（一〇三七）には興福寺衆徒が東大寺を襲い、東南院を破壊した。後冷泉紀（一〇五〇）の

永承五年九月には東大寺の手掻会に興福寺僧兵があばれこんだ。堀河紀（一一〇二）の庚辰四年には東大寺衆徒が興福寺を襲い、さらに八幡神輿を奉じて京都へ押しかけた。近衛紀（一一四五）久安元年には両寺の衆徒が奈良の街で白兵戦を演じている。

不俱戴天の両寺衆徒が、このたびはがっちり手をむんだ。

南都奈良の危機――

平家が大軍を動員して攻めこんでくるという情報をつかんだからである。

僧兵と言っても僧侶が武装化したものではない。大半は父祖伝来の武人であって、形式的に得度して僧の資格を持っているだけである。

大乘院信国。

まだ十九歳の若者だが彼の麾下には三百人を超える父祖代々の手兵があった。興福寺十六騎衆の一角をになう侍大将であった。

信国は系図によると、多田満仲に発し、源家頼光、頼親、頼房と筋目正しい武士の後裔である。八代目の信実から興福寺にはいり、衆徒僧綱に任じた。父の実遍が先年の多武峯合戦で壮烈な戦死をとげ、信国がその衣鉢を継いだ。

連日の軍議は、平家の大軍をどこで迎え撃つかで意見がわかれていた。

信国ら十六騎衆の実戦派は奈良の街を出て、野外で堂々の決戦を主張する。一方、興福寺、東大寺の奥深くにいる参謀派は市街戦を求めた。

数の上でも、武器の質、戦術からも、ともに衝突したら屈強な平家軍勢の敵ではないという。市民を戦斗に巻きこんでこそ利を発揮することができる。

それと、

「ひとたび伽藍へ籠城すれば、いかに平相国といえども手が出なくなる。由緒深い興福寺や東大寺を破壊したら、いかなる非難を世間から浴せかけられるかも知れない。地の利を生かし、戦乱を長引かせればやがて頼朝の大軍が京へなだれこんでくるであろう」と主張する。

この年の八月、石橋山で蜂起した源家の嫡流源頼朝はその戦いでこそやぶれたが、安房へ逃がれ、千葉氏の軍を味方につけたのだ。攻め下ってきた平維盛と富士川で対陣、一挙にこれを敗走させてしまったのだ。

それが十月のことで、南都出陣を迷っていた重衡が、八坂に生仏を訪ねてころとは情勢が急テンポで変化していたので

ある。

戦場をどこへ求めるにせよ、平家がすでに落日を見ようとしていることは、南都の僧兵全員が知りつくしていた。志気は大いにあがった。

頼朝の大軍が京都に接近しつつある。という希望的な情報も流れこんだ。

だがこれは誤報であって、頼朝は富士川の対陣で戦わずして維盛軍を追い散らしたあと、鎌倉へ帰って地元関東の足場固めにかかっていたのである。

奈良の悲劇はそんな虚報を信じこんだことであつた。

軍議がまだ統一をみない十二月二十八日の午さがりだった。突如として四万に及ぶ平家の軍が奈良の街に姿を現した。

最前線に配置した物見の者からの知らせもなかった。平家の少数尖兵は通過する村々で住民を一人残らず搦め捕らえ謀報活動をさせぬようにして進撃したからだ。さらに衆徒の最前線は、あつというまに包囲網のなかへおちこみ、みな殺しにされてしまったからだ。

第二線が潰走して奈良の街へ逃げこんだとき、すでにその背後に四万の大軍が追尾していたのである。

大乘院の信国は北円堂の前で迎え撃った。二百ほどの騎馬

隊が攻めこんで来たが、信国たちは堂内にこもり、矢ぶすまを張ってその進撃をはばんだ。数名の死者を残して騎馬隊は引きあげていった。

興福寺へなだれこんだ平家の軍勢は各所で衆徒の防戦に遇ったらしい。どれ一つ突破できず、いったん境内の外へ去った。

「戦さはわが方に有利になっているぞ。心して持ち場を固めよ」

夕餉の干し飯（い）を配りにきた参謀が誇らしげに信国の顔を見て言った。

野戦なぞ飛んでもない。こうして伽藍を楯にこもっていれば、平家が幾万押し寄せようを持ちこたえられるのだ、と言いたげであった。

その参謀の狼狽した顔を、信国は再び見ることはできなかった。

黄泉が迫ったとき信国は境内へ押し寄せてくるおびたしい人の波を見た。

平家軍ではないのだ。奈良の街人たちであった。

「此処は戦場だ。おぬしらの来る場所ではない」
制止した信国は街人の声に絶句した。

「家を焼かれて、追い立てられてきたのです。ほかにゆく場

所がないんです」

彼らの背後から煙りが迫っていた。

いったん興福寺、東大寺の境内から去った平家の軍勢は、奈良の街々に火を放ったのだ。民家が燃えあがった。

折から師走の強風が奈良には吹きまいていた。炎はまた新たな風を加える。

信国は駆け出して石塀のところへいった。眼下は火の渦だ。大仏殿が燃えあがっているのだ。

その火が三重塔へ飛び火している。狂女のように細い身体をくねらせ、身もだえしているではないか。

あとで聞いたのだが、この大仏殿の楼上へ逃げこんだ千七百余人の僧兵俗人が焼死したということだ。

大仏殿だけではなかった。街人が北円堂へ逃げこむと、それを見すまして数名の騎馬武者が炎をあげる木片を北円堂めがけて投げこみはじめたのである。

信国は太刀を抜くと、これらの騎馬武者を斬った。いや、おどろ狂う馬の尻や後脚を斬ってまわった。落馬する武者を、輩下の堂衆が三人五人がかりで押さえこんで、首を刎ねた。

しかし彼らが投げこんだ炎は北円堂の壁を燃え上がらせていた。

＜ある女の死＞



「出よ、此処にいては駄目だ」

堂の入口に立った信国は声をからして叫んだ。

言われるまでもなく堂内の人々は、われ先にと炎を逃がれて駆け出てきた。

何人かが逃げおくれ、煙りの底にころがっていった。

信国は百名余りの彼らを誘導して北円堂を遠ざかった。小椋池のほとりまで逃げた。

すでに闇が来ているはずだが、そこは明るかった。七堂伽藍を焼く炎で日中のようだった。

「此処でしばらく様子を見るんだ」

信国はみんなを制し、池のほとりをめぐる林中にかたまつて坐らせた。

そこは炎の海から離れていた。妙に静かだった。

あれほど騒いでいた連中が、急に声を消し、ひっそりと坐りこんだ。

だが、この静寂も長くは持続しなかった。

数十騎の平家武者が林の奥から姿を現したのである。彼らはいきなり坐りこんだ街人たちめがけて、矢を放ちはじめた。

阿鼻叫喚が林中に渦まいた。

信国の眼前で若い女人が胸をおさえて倒れた。覗きこむ

と、左の乳房に深々と太い矢が突き刺さっていた。鮮血が流れ出ている。表情に生きた色がない。

むろんいま、初めて顔を合せた未知の女人だった。

「しっかりせよ。さあ、抜いてやるからな」

一斉に矢を放射した武者たちは、そのまま馬蹄を響かせて去っていった。

矢羽を掴む信国に、女人は力なく首を振った。

「もう妾は駄目です」

かすかに言葉を綴った。

そしてやっと動く右手で、頭にかぶっていた狩衣をはぎ取り、それを信国に手渡そうとする。

「どういうことだ」

「お逃げ下さい。これをかぶって」

「なぜ？」

「女に見られます。逃げられるでしょう」

自分が駄目なら、見知らぬあなたでもせめて生きのびて下さい、と女人は言いたげである。

三

いったいこの心象は誰が描き上げたものだろう。

と、信国は後になってしばしばあの女人の顔を思いうかべ

た。

自分が救われぬと悟ったとき、人間はひとりでも多く他人を救いたくなるものであろうか。この無償の意志はどこに根ざしているのだろうか。

大乘院の信国は、未知の女人との別れぎわに奇妙な言葉を聞いた。

「さあいつて下さい。妾はここで死にます」

「いや、わしが矢を抜いて……」

「駄目です。妾はほっておいて下さい。そのかわり」

「そのかわり……何か言いくくことでもあるのか」

「ひと声だけお念仏を唱えて下さい」

「念仏を」

「南無阿弥陀仏とおっしゃって下さい」

武装しているとはいえ自分も僧侶のはしくれた。それがこんな無知蒙昧な女性から、念仏の唱え方を教えられている。おかしくもあり、はずかしもあった。

「おぬしは誰から仏の道を教えられたのだ」

「南無阿弥陀仏さまからです」

「南無阿弥陀仏さま？」

「俊乗房におられた重源さまです」

「おお、重源どの」

「あの方は南無阿弥陀仏さまとおっしゃられるのです。さあ、ひと声お唱え下さい」

「わかった」

興福寺大乗院の衆徒信国が、念仏ひじりとなった奇縁は、じつにこの未知な女人からの教化であつた。

大乗院の信国——後のひじり名は住蓮房である。

だが住蓮房となるまでに、彼はまだ幾多の破乱の道を歩かねばならない。

さしづめが、この炎の興福寺からの脱出であつた。

此処も燃えさかっている東金堂から、住蓮房信国は、難民の群れにまじつて奈良の街へ脱出していった。

何度か平家の軍勢による検問に引っかかった。司令官重衡からの敵命で、衆徒はひとり残らず引くくれと言われているのだ。

太刀を捨てた住蓮は、頭からかぶった女人用の狩衣のおかげで、どこかの検問でも助かった。女人と見なされて不問に付されたのである。

炎の奈良は脱出したが、住蓮は何処へゆくというあてどがなかった。

ふと思いついたのが、女人が最後に言い残した南無阿弥陀仏さま——俊乗房重源のことだった。一度会つて是非あの念

仏の話を聞きたい。

しかし重源はいったいいま何処にいるのだろうか。

焼けただれた奈良の街を数日間さまよつた。出会つた僧に必ず声をかけた。だが重源を所在を知る者はひとりもいなかった。

奈良と言えど誰もが大仏殿だ。

そこはすでに焼け落ちた。

在りし日の金堂は二重造四注本瓦葺。葺かれた瓦の枚数は百万三千三百枚だったという。正面十一間。側面七間。高さ十五丈六尺。東西二十九丈。南北十七丈。柱の数九十六本。現在のものではない。重衡に焼かれる以前、つまり天平の堂宇だ。現在の大仏殿は東西十八丈八尺二寸、南北十六丈六尺六寸、柱数は六十本と規模はやや小さくなっている。

焼跡に焼けただれた廬舎那仏がお坐りになっている。

住蓮に限らない。焼け出された奈良の街人は毎日この焼け跡へやってきた。放心した眼で廬舎那仏を眺めるだけである。この大仏殿はいつ復興するのか。それを考えることが、おのれの生活の復元につながるとでも言うのだから。

その朝の住蓮はしょんぼり焼け跡に立っていた。

三千人を超える衆徒が殺された。興福寺と東大寺を合せて八千人ほどいたから、その三分の一以上が地上から姿を消し

たのである。興福寺十六騎衆はおろか、かつての輩下の誰とも顔を合せていなかった。

ひとりの僧が盧舎那仏の前に立ち、經文を唱えあげている。それが終るのを待つて住蓮は声をかけた。

「俊重房重源さまがどこにいられるか、ご存じでしょうか」

「重源どのにか」

「是非お会いしたいことがあるのです」

「おぬしはどこの誰か」

僧はじろりと住蓮をかえりみた品定めをやっている。

「それは一寸申しにくいのですが、生きる道に迷っている者です」

「重源どのに会ってどうする」

「その迷った道からぬけ出す方法をお願いしたく思いまして」

「致し方ない。」

住蓮は女人の話をした。当然、自分が興福寺大乗院の衆徒であったことも打明けた。この僧なら平家へ密告しそうにも思えなかった。どこか品位とおかしがたい權威があったからだ。

「よろしい、合わせてやろう」

「どこにいらっしゃるのですか」

「わしについて来い。じつはわしもこれから重源どのに会いに出かけるところだ」

「ああ、あなたさまも」

僧は歩きだした。大股で大仏殿の焼け跡を去っていった。

奈良の街に、すでに兵士の軍勢は一兵もいなかった。

聖都を焼き払って、うしろめたかったからか。

そんな余裕ではない。軍事に多忙をきわめている。

南紀で蜂起した源行家の軍が、美濃から近江路へ迫っているのだ。重衡の軍は急ぎそちらへ向へ進軍している。

志気まさに軒昂だった。富士川で、飛び立つ鳥の羽ばたきを敵の襲来と間違えて逃走した同じ兵とは思われなかった。事実、富士川から逃げ戻った部隊が幾組か重衡軍に再編成されていた。志気が昂まったのは、奈良を焼いたからだ。衆徒や街人をあまた虐殺したからだ。泰平に馴れた平氏の軍勢に残忍な斗志がよみがえっていた。それを計算しての放火虐殺だったのかも知れない。春日山を遠望する街外ずれの坂路まできた。

「わしはな、東大寺東南院にいる明遍と申す者だ」

僧は初めて身分を告げた。住蓮房信国はびっくりして僧の顔を見直さずにおれなかった。明遍律師は奈良でひろく知れわたった学匠だったからである。

(つづく)

二 編集後記 二

○軒先にすだく虫の音が聞かれはじめる頃ともなると暑さも一段落、心地よい風があたりを吹きぬけ、好季秋を迎える。しかし都会地にあつては、この季節の使者ともいふべき虫の音を聞くことが困難となつてきている。自然環境が叫ばれつつある今日ではあるが、人為的破壊行動は私たちの足もとまできているのだ。このような現状に対処するため、何某を守る会と称する任意団体が続々と結成され、各々の原状回復のため活動を始めた。よき自然環境を後世に残すため、それぞれの立場でできる限りの協力をすべき時点まで来ているのではなからうか。

○こうした折、私たちは秋の彼岸会を迎える。この忙しい殺伐とした社会を乗りきるため、人生の理想境を目指し、時を限って修めるこの法会は、人生の反省の時として、休息の時として、またとない時節であらう。

この彼岸会をより多くの方々に理解いただきたく、今回は秋田県角館町報身寺住職津村諦堂師に彼岸法話をご執筆いただいた。津村師は東北の地にあって、若き頃より向学の志にもえ研鑽努力され、その実績をもとに現在は教化布教の第一線で活躍をされている。

○北に続いて南の話題を。ご承知の通り南国沖縄の本土復帰を記念して華々しく開催された「沖縄海洋博」は、その前評判とは裏腹に、何か一つ盛りあがり欠けている。大戦後三十年経ったとはいえ、その戦禍いまだ消えずという現地の特殊な実情を理解することが、即海洋博の成功につながるような気がしてならない。

○この沖縄の地に現在、浄土宗沖縄別院袋中寺が再建されつつある。江戸初期袋中人によつて教線がはられて以来、一時跡絶えていた念仏の教えを、今日改めて広めることは中々困難なことであらうが、地道な努力が報われることを期待してやまない。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十年八月二十五日 印刷
昭和五十年九月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

文部省出版助成図書

徳本行者全集 全五巻 第一巻 発売

定価 8500円（送料共） 第一巻 A5判 530ページ

近世浄土宗史において庶民に対して絶大なる教化力をもった徳本行者の全生涯、勸化聞書、請待日記、和歌等を網羅。研究の資料に教化の参考には是非この全集をおそなえ下さい。

発行所 山喜房仏書林（東京大学赤門前）
申込所 ☎170 東京都豊島区西巣鴨3-20-1
大正大学内 浄土学研究室
振替（東京）151610 番

「浄土」教化トラクト

『和文浄土三部経』

附 法然上人撰「三部経釈」抄述

新書版 204ページ 定価200円



好評『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価180円（〒70円）

（200部以上 単価160円 送料実費）

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏行者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。



〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話（03）262-5944 番